

3国内情報

われらが堆肥センター
—— その復活とみどりの町づくり ——

高知県高幡家畜保健衛生所 吉田 史孝

(1)	過剰在庫で家畜ふんの受入制限まで行なっていた堆肥センターが、昨年と今年の需要期には在庫がなくなるまで需給を改善した。
(2)	女性グループが牛ふん堆肥をベースにした生ゴミ分解促進材『かえるんど』を提案し、JA四万十堆肥センターと共同で商品開発を行う。 その後の地道な『かえるんど』による生ゴミ処理と花・野菜づくりが、町ぐるみでの「リサイクル&フラワー運動」を生んだ。今では花フェスタの開催や国体に向けての花のプランターづくりを実践されるなど、自然にやさしい地域の暮らしの輪が広がっている。

1 JA四万十堆肥センター

(1) 堆肥センターと周辺住民

窪川町は高知県中西部の四万十川上中流域に位置する県有数の畜産の町である。ここに、堆肥センターは「畜産公害の解消と地力増進を図る」との理想を基に、昭和62年度の国の補助事業を受け、総事業費3億6,000万円を投じて建設された。

しかし、稼働直後から発酵処理過程で生じるアンモニアを主成分とする悪臭が周辺住民からの苦情の対象となり、また、できあがった堆肥の品質も十分なものでなく、多くの問題をかかえての操業を余儀なくされてきた。

その後、堆肥の品質向上では一定の成果を収めていたが、周辺住民への悪臭問題を根本的に解決することはできなかった。そこで、平成8年度に環境保全型畜産確立対策事業を導入し、1億4,800万円の事業費で土壌脱臭法による施設全体の脱臭と、より一層の品質向上を目的に施設改善を行った。この土壌脱臭処理方式の導入によって最大の課題であった悪臭問題はほぼ解決できた。

(2) 売れない堆肥

現在では周辺住民にも認知された施設として環境保全型農業の核となっている堆肥センターだが、一度広がった堆肥の悪評をなかなか覆すことができなかった。(図1)

当初は計画どおり毎年ほぼ14,000tの家畜ふんを受入し、およそ7,000tの堆肥を生産してきたが、堆肥販売が不調で毎年余剰在庫を増やしてきた。そのため平成7年以降は在庫増と品質低下の悪循環に陥っていた。

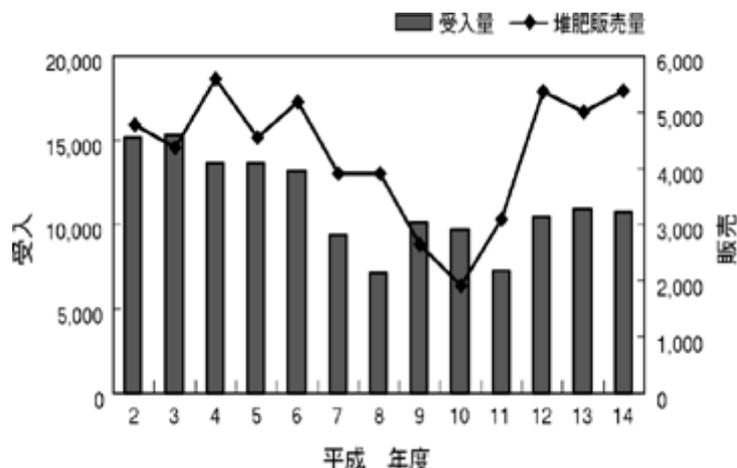


図1 家畜ふん受入量と堆肥販売量の推移(トン)

(3) 堆肥センターは畜産農家の宝

堆肥センターは売れる堆肥をつくるため、平成7年から家畜ふんの受入を10,000tに制限し、平成11年には更に7,000tに制限をした。このころは、畜舎の近辺あちらこちらで野積みの山が現れたり、生産者からは経営存続の不安を訴えられる等堆肥センターが如何に地域畜産の支えとなっているか再認識させられた。

(4) 救世主ダイズ登場

堆肥の活用についてはイネを中心に進められてきたが、転作を担う作物として平成9年度には町とJAがコントラクターを組織し、ダイズ栽培に取り組んだ。平成14年度は栽培面積がおよそ200haまで拡大し、堆肥を栽培体系に組み込んだこともあっておよそ2,500tの堆肥がダイズ圃場に散布された。

現在、堆肥センターでは家畜ふんを受入制限もなく年間11,000t程度処理し、およそ5,000tの堆肥を生産している。需要が5,000t以上まで伸びたことから時期によっては不足する状態となってきた。

表1 平成14年度作物別堆肥利用量

平成14年4月～15年3月

	合計	作物別								
		大豆	水稲	ピーマン	ニラ	ショウガ	キュウリ	ユズ	タバコ	その他
JA四万十 堆肥センター	t 5,131	t 2,580	t 796	t 121	t 228	t 20	t 56	t 31	t 84	t 1,215

2 女性パワーがひろげる地域ぐるみの堆肥利用

(1) ヤング・スマイル・クラブの発足

ヤング・スマイル・クラブは平成元年12月JA窪川町(現JA四万十)ショウガ青年部の婦人13名で「仲良しグループ」として発足し、農業簿記の継続的な学習や農業施設・青果物市場の施設研修を重ねていた。その課程で自分たちが「たんなる労働力の提供者」としてしか農業経営に関わっていないことを反省するようになった。

この反省から、今後は「経営の良きパートナー」として生きていくことの必要性を痛感し、農業の原点である「土づくり」「堆肥づくり」の学習を始めた。

この過程で地元にある堆肥センターと密接なかかわりをもつことになった。

(2) 生ゴミ分解促進材「かえるんど」を堆肥センターと共同開発

「堆肥づくり」の学習成果として主婦の立場から、毎日家庭から出てくる生ゴミを手軽に堆肥化できる、堆肥を原料とした生ゴミ分解促進材の開発を堆肥センターに提案した。

堆肥センターではこの提案を受け、何度かの試作品を製造し、ヤング・スマイル・クラブでの生ゴミ分解効果を確認過程を経て、平成6年3月に生ゴミ分解促進材「かえるんど」を商品化した。

(3) 大きな反響と薄かった地元の関心

この「かえるんど」の発売と前後して、「生ゴミの堆肥化リサイクル運動」を提唱し、県内外の婦人部や市民団体・消費者団体から講師として招かれるようになった。こうして、積極的な交流を展開すると同時に、この運動は広くマスコミなどでも取り上げられ、新聞・雑誌・テレビなどの取材攻勢を受けるようになった。

ところが、一番大事な地元からの関心は薄かった。

生ゴミは手軽に堆肥に「かえるんど」

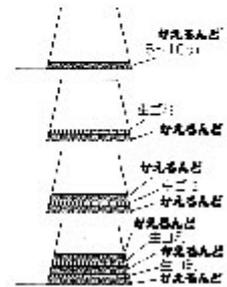
「かえるんど」は色々な容器を利用して生ゴミ堆肥づくりができます。



平成12年家の光5月号

●生ゴミ処理容器を利用して

- ①「かえるんど」を底に5～10cmの厚さで敷きつめます。
- ②生ゴミの水分をよくきり①の上にならびに広げます。
- ③生ゴミ重量の2～3割の「かえるんど」を②の上にふりかけます。
- ④その後は②～③のくり返しでかえるんど+生ゴミ+かえるんど…とサンベイチ状に使用して下さい。
- ⑤生ゴミ処理器が満杯になった後、1ヶ月もすると良質の堆肥ができあがりやす。 (生ゴミ処理器はとなりに移動して②～④をくり返します。)



(4) 町ぐるみで「花いっぱい運動」

生ゴミ処理容器及び「かえるんど」を活用した「生ゴミ堆肥化リサイクル」運動を地域をあげて取り組んで行くため、平成7年5月には、町役場、商工会、森林組合、普及センター、JA四万十に呼びかけて推進協議会を設置し、「生ゴミ堆肥を利用した町内花いっぱい運動」(略称R&F運動=リサイクル・アンド・フラワー運動)を展開することになった。

商工会の女性部ともこの運動を通して交流の輪が広がり、「かえるんど」を使った生ゴミ堆肥化の実演講習や花の育て方の勉強会などを繰り広げるようになった。

また、この運動がマスコミなどでも紹介されるとともに、町内のあちらこちらで花を飾る家がみられるようになり、道行く人々の目を楽しませてくれる。

「かえるんど」が生産者と一般町民との交流を生んでくれたのがなによりだった。

足元からの環境保全

あなたもわたしたちと一緒に
「生ゴミでつくる自分だけの堆肥づくり」
にチャレンジしてみませんか。



わたしたちは町内の
「生ゴミ堆肥化リサイクル運動」をすすめています。

▶ 利用説明をするクラブ員



3 やってみませんか「かえるんど」で生ゴミ処理

農家の女性グループが生ゴミ処理と花・野菜づくりを始めて早や9年になるが、女性たちは益々元気、ますますヤング・スマイルに磨きがかかってきた。「かえるんど」にはそんな彼女達のパワーが含まれているに違いない。

「かえるんど」1袋で4人家族1か月分の生ゴミが堆肥に変わります。詳しくは、JALしまんと(TEL 0880-22-5179)まで。宅配もやっておりますよ。もちろん彼女達も少しずつですが全国各地で種を

播いているところです。